

# 絶対の愛

2007(平成19)年5月9日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・脚本・製作・編集=キム・ギドク/出演=ソン・ヒヨナ/ハ・ジョンウ/パク・チヨン/キム・ソンミン/ソ・ジソク/チョン・ファン/チョン・キョウン/カン・シンチョル/キム・ジヒュン/キム・ボナ/イム・ヒョンソン/チェ・タンソク/ホン・キョンヨン/杉野希妃/アン・ソリム (ハピネット配給/2006年韓国、日本映画/98分)

## 第2章

禁じられるほど燃え上がる？

……キム・ギドク監督の13作目は、整形美女を主人公とし、コインの表裏の関係にある「絶対の愛」=「TIME」をテーマとしたもの。私の身体に飽きたのでは……？ 整形天国の韓国では、それだけの動機で十分……？ 面白いのは「整形返し」だが、それは一体ナニ……？ 映画はテーマ設定がすべて、あらためてそう思われる天才ぶりに今回も脱帽……。

### キム・ギドク監督、13作目の主人公は……？

9作目の『春夏秋冬そして春』(03年)、10作目の『サマリア』(04年)、11作目の『うつせみ』(04年)、12作目の『弓』(05年)に続く、天才キム・ギドク監督の13作目の物語の主人公は整形美女……？

韓国は世界有数の整形天国らしく、この映画の主人公スェヒを演ずるソン・ヒヨナも「二重瞼と歯茎の整形手術を受けたことがある」と告白。もともと、「多くの芸能人が整形していると噂される中、はっきりカミングアウトした彼女の潔さはかえってその好感度をあげることになった」とのことだが……？

しかし、キム・ギドク監督にとって、顔に整形を施す主人公を起用し、露骨におどろおどろしい(?)整形手術の実態をスクリーン上に表現したのは、この映画本来のテーマを語るうえでの単なる道具……？

## この映画のテーマは……？

この映画のテーマはその邦題どおり「絶対の愛」だが、原題は「TIME」、つまり時、時間とされている。一見この2つのタイトルは無関係のようにみえるが、実は同一。すなわち愛は時が経つにつれて失われていき、永遠の愛などは存在しないもの……？ キム・ギドク監督は、7作目の『悪い男』（02年）や『春夏秋冬そして春』『うつせみ』でも「究極の愛」をテーマとして描いたが、この映画のテーマもそれと同じ。「絶対の愛」と「TIME」は、そのアプローチの仕方が両極端に異なるものの、求めるものは全く同じ。つまり、「絶対の愛」と「TIME」はコインの表裏の関係のようなもの……？

秦の始皇帝は不老不死の薬を求めたが、遂にそれを果たすことはできなかった。他方、尾道に移り住んだ作家林芙美子は『放浪記』の中で、「花のいのちは短くて、苦しきことのみ多かりき」と、時の移り変わりど人生のはかなさを表現した。

よく考えてみれば、常に人間が求める「永遠」などというものは存在しないのは当然……。しかし、人間は、特に女性は永遠の愛を欲するもの……？ ところが、永遠の愛を求める女性の大敵となるのが、男の「飽き」……？ それに対処するためには何が必要……？ 「絶対の愛」と「TIME」をテーマとして、これから展開される整形美女の物語とは……？

## 恋人間のセックス鮮度はいつまで……？

肉体関係を続けている恋人同士のセックス鮮度はいつまで続くのか……？ とりわけ、女性が抱く「私の身体に飽きたのでは？」という不安はどの程度のものなのか……？ この映画ではキム・ギドク監督は、冒頭にこの問題点を明確に提示する。

昔『3年目の浮気』という歌が大ヒットしたように、恋人同士のセックス鮮度は一般的に2～3年が限度……？ そんな私の予想どおり（？）、互いに深く愛しあっているジウ（ハ・ジョンウ）とセヒ（パク・チヨン）は、付き合いはじめてから2年になるらしいから、ちょうど難しい頃……？ そんな状態の中、ジウが他の女にちょっとでも興味を示すと大変……？

## 第1は喫茶店でのバトル、第2はベッド上でのバトルだが……？

待ち合わせていた喫茶店の中で展開される第1のバトルは、セヒが遅れて喫茶店に入ってきた際、ジウがかわいいウエイトレス（杉野希妃）に見惚れていたこと。さらに店の外で駐車するについてのトラブルの手助けをしたジウが、3人連れの女の子にやさしくしたり、名刺を渡したこと。そんなことをいちいち騒ぎたてられたのでは、男の方はやってられないが……？

第2のバトルは、ベッド上でなかなかセヒを抱く気にならないジウ、あるいは抱ける状態にならないジウを見て、セヒが「他の女を想像してみたら。例えば今日の喫茶店の女を……」と悪魔のようにささやいたために発生したもの。20代の若い男が恋人とのセックスにおいて役に立たない状態になるというのはよほどのことだが、そうかといってセヒがささやいたような想像をすることによって役に立つようになれば、より深刻なバトルになるのは当然……。それくらいの読みができない(?) ジウは情けない限りだが、残念ながら男にとっては、想像と下半身は連動しているもの……？

## インフォームド・コンセントは万全だが……

医師の説明義務とインフォームド・コンセントは、医療過誤訴訟で常に問題となる大きな論点だが、この映画で整形外科医（キム・ソンミン）がセヒに対して行うインフォームド・コンセントは万全……。

「今のままで十分キレイだ」と助言するのは勇気のいることで、専門家としての良心をしっかりと持っていることの証し……？ 「弱い自分がいた」と弁明した姉齒元一級建築士やカネボウの粉飾決算に手を染めていた会計士たちの姿を見れば、この整形外科医が、今のままで十分キレイだから「手術をするのはやめなさい」とアドバイスするのは、自らの仕事や稼ぎを否定するわけで、これは「弱い自分」に負けてしまえば決してできない行動。しかもこの整形外科医は、セヒに対して整形手術の恐ろしさをビデオで見せつけるまでして翻意を促しているから立派なもの……。

しかし、他の女に向かうジウの心を取り戻すためには顔を変えるのが1番と信

じ込んでいるセヒの決断は固かった。そこで、やっと整形外科医はセヒの整形手術に着手したが、手術後自然な状態に戻るのは約6カ月後とのこと。するとそれまでセヒは一体どんな生活を……？ いやはや、よくぞそんな決断ができるものだ、女の執念の恐さにまずはビックリ……。

## 彫刻島ってホントにあるの……？

この映画では、ジウの仕事は明確になっていない。少なくとも、毎日きちんと会社に出勤する仕事でないことは、ある日セヒが忽然と姿を隠した後、友人たちと遊び歩き、次々と女の子を引っかけようとしている生活ぶりからも明らか……？ しかし序盤の展開が終わると、ジウはどうも写真を撮る仕事をしているらしい（プレスシートによると映画の編集マンらしい……？）ということは、彫刻島で写真を撮っている姿から少しずつわかってくる。フェリーで渡っていくこの彫刻島は結構面白い島だから、一見の価値あり……？

ジウが奇妙な覆面をした美しい（美しそうな）女を発見したのは、そんな彫刻島へ向かうフェリーの中。ところが、彫刻島の中でこの覆面女は、まるでジウを翻弄するかのよう、ジウの前に現れては消えていくことのくり返し……。一体この女は何者……？ そして、何を狙っているの……？

ちなみに、この彫刻島ってホントにあるの……？ 誰もがそう思うはずだが、その回答はプレスシートの中に書かれてあるので、是非それで確認を……。

## 「汝の神を試すなかれ」の教えをどう理解……？

キリスト教は人間に対して、神への絶対的な信仰を要求する宗教だから、人間が神サマを試すことは厳禁。したがって、「汝の神を試すなかれ」という教えは絶対的なもの……？

突然失踪してしまったセヒのことをずっと忘れられないジウだったが、喫茶店で新たに出会った魅力的な女性は、明らかに彼女の方からジウに対してモーションをかけてきた。しかも彼女の名前は、セヒとよく似たスエヒ（ソン・ヒヨナ）。そんなジウとスエヒが親しくなり、愛し合い、セックスが始まったのは当然。この2人はまるで「ピッタリの服」のようにすべての相性がバッチリだったらしい

……。それは一体ナゼ……。？　ここで興味深いことは、男ってホントに顔が変われば、セックスをしてもその肉体が誰のものがわからないの……。？　ということ。機会があれば私も是非試してみたいものだが、残念ながら60歳近くになってしまった私には、到底そんなチャンスはない……。？

## 🎬 「ウソも方便」の格言は……。？

それはともかく、「汝の神を試すなかれ」の教えを破ったのはスエヒ。つまり、せつかく2人は「ピッタリの服」状態になっていたのに、スエヒはあえて「もしセヒが戻ってきたらあなたはどうする？」とジウに質問したのだった。普通の男だったら、というよりちょっとマシなセンスの男なら、これに対して「もうセヒのことは忘れた。僕が愛しているのは君だけだよ」と言うものだが、ジウは何ともバカ正直。したがって、そのジウは「わからない」と答えてしまったから大変。

スエヒは「汝の神を試すなかれ」の教えに背き(？)、またジウは「ウソも方便」という格言を無視したため(？)、スエヒとジウの間には新たな亀裂が生じることに。そのうえ、スエヒはセヒの名前でジウの家にメッセージまで……。その結果ジウは、あれほど愛していると言っていたスエヒと別れるという宣言を……。こりゃ最悪の結果だが、さすがキム・ギドク監督は、局面のさばき方が鮮やか……。

## 🎬 セヒよりスエヒの方が……。？

整形外科医はセヒのことを「今のままで十分キレイだ」と言っていたが、私の目には、もしセヒが整形手術によってスエヒのようになるのであれば、手術をした意味があり、もっとキレイになったと思える……。？　それはつまり、『スカーレットレター』(04年)で、殺人事件の被害者の妻でありながら、刑事役のハン・ソッキュに絡んでいくという微妙な役を演じたソン・ヒヨナ(『シネマルーム8』99頁参照)の方が、セヒ役のパク・チヨンよりキレイだということ……。？

もっとも、そんなソン・ヒヨナの最初のスクリーンへの登場は、服装こそおしゃれな赤いワンピース姿だが、顔は覆面で覆われたうえ、目には黒いサングラスという何とも異様な姿。絶世の美女をこんな姿で登場させるキム・ギドク監督の

発想にビックリするとともに、こんな役に果敢にチャレンジしたソン・ヒヨナの女優根性も見上げたもの……。ちなみに、チラシヤネット情報でも、このソン・ヒヨナのグロテスク(?)な姿を見ることができるから、是非それに注目を……。

## セヒの仮面をつけたスエヒの姿は不気味……

単純なジウには、なぜスエヒが「もしセヒが戻ってきたら……」などと聞いてきたのか、きっとわかってなかったはず……。またその結果、ジウから別れると宣言されたスエヒのショックの大きさも理解できなかったはず……。それは、別れを宣言した後、ジウが再びスエヒの部屋を訪ねてきたことによっても明らか……。なぜなら、そんな宣言をされた後、ジウが再びスエヒの部屋を訪れても、スエヒは100%それを拒否することはわかり切っているのだから……？

そんな女心の機微に疎いジウは、一方でスエヒの部屋を訪れながら、他方でセヒと会うために喫茶店へ赴いた。この時のジウの気持はきっと、期待で胸がいっぱいだったはず……。ところが、いつもの席に座っていたのは、セヒの顔写真を仮面のように顔につけた1人の女。この姿も不気味。さて、この女は一体ダレ？ 何ともショッキングなシーンの連続に、きっとあなたも驚かされるはず……。

## 喫茶店は人生の縮図……？

この映画では、1軒の喫茶店が男と女の対話の舞台として再三再四登場する。冒頭のジウとセヒのケンカシーンもこの喫茶店内だし、その後も再三展開される男と女のバトルの舞台もこの喫茶店となる。営業主としては、ジウのようなトラブル持ち込み客は迷惑千万……。ジウはよく1人でこの喫茶店に行きコーヒーを飲んでいるが、トラブル続きとなっている同じ店で飲まなくてもいいのに、とつい思ってしまったが、これはキム・ギドク監督の低予算かつ短時間で、というモットーによるもの……？

それはともかく、この映画を観ていると、喫茶店は人生の縮図だということがよくわかる。たしかに、あるシーンで若い男が言っていたように、「ここは喫茶店なんだから、ケンカは家でやれ」というのは正論。韓国人は日本人に比べると何ゴトにも気性が激しいが、公共性の意識の薄弱さにかけては、日本人と比べて

似たり寄ったり……？ 喫茶店におけるさまざまなパターンでの男女間のバトルを観ながら、ついそんなことを考えてしまったが……？

## 「整形返し」とは……？

キム・ギドク監督の描く世界の面白さの1つは、どこで映画がジ・エンドになるのかが容易に見えないところ……？ セヒ=スエヒであったことをバカなジウがやっと悟ったことによって、映画を終わらせることも可能だが、ここからキム・ギドク監督はさらに「整形返し」という驚くべきストーリーを展開させた。もちろん、ここでいう「整形返し」とは一般的な用語ではないから、何を意味するのかあなたにはわからないはず。したがって、ホントはこれ以降のこの映画の展開は書かない方がベター……？ 「整形返し」の意味をじっくりと考えながら、この映画の面白さを想像し、映画館に赴いてほしいものが……。

## 衝撃的なラストもいつものとおり……

キム・ギドク監督の映画のラストは衝撃的なものが多いが、それが天才の天才たる所以。そして、整形美女を主人公として、絶対の愛= TIME をテーマとして描いたこの映画のラストも衝撃的。「整形返し」によってショックを受けたスエヒは、以降ジウの姿を探し求めるが、なかなか発見できなかったのは、かつてセヒを求めてなかなか発見できなかったジウと同じ……。しかし、世の中には雰囲気よく似た男はたくさんいるし、「ピッタリの服」のような男もいるもの。そんなことを考え行動していくスエヒは、既に半分精神異常気味……？

さらにショッキングなシーンは、ある日スエヒの目の前で起こった交通事故。その交通事故によって顔をメチャメチャに潰された男は、もはや誰なのか誰にも特定できないことに……。そんな衝撃的な結末が描かれていく中、人間のデジャヴ（既視感）を刺激するかのように冒頭のシーンが……。一体、人間の顔って何なの……？ 男が女を愛し、女が男を愛するについて、顔はどこまで意味があるの……？ 映画を観終わった瞬間、思わずゾーとするような感覚に襲われたのは私だけ……？ さて、あなたの感想は……？

2007(平成19)年5月11日記